

国内医学分野における会議録の入手可能性について

－横断的観察研究－

村上 陽菜

一般財団法人 日本医薬情報センター附属図書館

【背景】研究者が研究集会で行う学会発表の抄録（Abstracts）をまとめて冊子として発行したものを会議録（学会抄録集、要旨集）という。学会発表はその場限りのものであり、会議録がなければ内容を知ることができない。しかし、会議録は代表的な灰色文献（Gray Literature）といわれ、出版流通のコントロール下になく、学术论文と比較し相対的に収集・保存が困難な学術情報資源である。本研究では医学分野の会議録を対象とする。医学分野における会議録の特徴として、①症例報告の集積、②システマティックレビューにおける出版バイアスの是正¹、③医薬品の安全性情報収集における法規制などがあり、医学分野の会議録を収集する意義は非常に大きい。

【目的】会議録の収集・保存は学術情報流通における重要な課題のひとつである。本研究では国内医学分野の会議録の入手可能性について検討するため、国内医学会として主に日本医学会分科会（142学会）を対象に、2010年および2021年に開催された研究集会の会議録について、国内の代表的な医薬文献データベース²にNDL-OPACを加えた4つのデータベースの所蔵を調査した。本研究における入手可能性とはデータベースにその会議録の情報が収録されているかいないかに着目した独自の視点である。本研究では経年変化に着目しつつ、「定期刊行物に掲載された会議録は入手可能性が高い」という仮説に基づいた検討を行い、会議録収集の現況、ならびに今後の課題について述べる。

【結果】Web of Scienceでの他分野の会議録の収載率を検討した先行研究と比較し、国内医学分野の会議録の入手可能性が高い水準にあることが示された。また、データベースにもよるが、フィッシャーの正確確率検定により、定期刊行物に掲載された会議録は入手可能性が高く、定期刊行物に掲載されない場合は入手可能性が低いことが有意に示された。しかし、2010年から2021年の約11年において、定期刊行物に掲載される会議録は減少し、データベースへの収載も減少していた。さらに、約11年で発行形態が変化した会議録について検討した結果、電子アプリの発行など電子媒体での会議録配布が増加し、定期刊行物に掲載される会議録が減少していること、その結果、入手可能性が低下していることなどが推測された。近年の電子媒体の普及を鑑みると、この傾向は今後も継続すると考えられる。以上より、本研究の結果、国内医学分野の会議録の入手可能性は今後さらに低下する恐れがあり、会議録を定期刊行物に掲載することが入手可能性を高める可能性があることを示した。大会当日は研究方法の詳細、結果の具体的な数値について報告する。

¹ Hopewell S, et al. Grey literature in meta - analyses of randomized trials of health care interventions. Cochrane Database of Systematic Reviews 2007.

² 宇山久美子. “国内医薬文献データベースの特徴と検索時の問題点”. EBMのための情報戦略：エビデンスをつくる、つたえる、つかう. 2000, p.137-159.